

## 1930年代初頭の米国開催巡回日本画展覧会について

清水恵美子 SHIMIZU Emiko(お茶の水女子大学・茨城大学五浦美術文化研究所)

1931年11月から、米国で現代日本画の巡回展が開催された。オハイオ州トレドを皮切りに、ニューヨーク、ボストンなど複数の都市を巡回した。本報告は、この展覧会の基本的構図を明らかにするのが目的である。まず、展覧会開催決定までの経緯を、米国の美術館と日本政府との交渉、国内での出品作家選定を中心に追っていく。展覧会の発端は、1928年トレド美術館学芸員ジョン・アーサー・マックリーンが、ワシントンD.Cの日本大使館に、国際東洋美術展覧会開催のため日本画の出品を依頼したことにあった。彼はボストン美術館で岡倉覚三の下で働いた人物である。日本政府がその要請に応じたのは1930年、だが日本とコリアの絵画の展示を計画するマックリーンの希望を却下し、日本画展覧会として開催するよう準備を進めていく。トレド美術館での開催が決定すると、その情報を得たニューヨークのレーリッヒ美術館から日本画展開催希望の申し出が届く。トレド展終了後、1932年1月からニューヨークで展覧会が開催されることが決まり、その後、展覧会は複数の都市に巡回していくこととなる。満州事変が勃発し、米国市民の対日感情が悪化する中、展覧会是对米宣伝としての重要性を増していく。一方、国内では、文部省、帝国美術院、日本美術院との確執によって、出品作家選定に至る道程は平坦ではなく、その過程で岡倉由三郎が特使として現地に派遣されることが決定する。次に、米国で展覧会はどのような環境で開催され、いかなる反応があったのか、これまでの調査で把握できたことを述べる。展覧会は、レーリッヒ展のあと、ボストン、ボルチモア、ミルウォーキー、シンシナティー、セントルイス、スプリング・フィールド、マンチェスター、デイトン、ロサンゼルスにおいて、各会場約一カ月の会期で開催された。出品作とそれがどのように展示されたのか、トレド展図録やレーリッヒ展図録等から確認する。また、岡倉由三郎の米国での活動を把握するとともに、新聞、雑誌の報道や関係者の報告書等から、展覧会の反響や状況を浮き彫りにする。

最後に、この展覧会の効果と問題点を考察する。日本画展における文化交流の有益性を主張するニューヨーク総領事堀内謙介は、次々と開催地を追加決定し、巡回展は当初の計画より長期化する。だが、頻繁に行われる展示と移動によって、いくつかの作品がダメージを負うと、日本から巡回展打ち切りを求める声が強くなっていく。作品は1933年3月、ようやく日本に発送され、5月に横浜に到着した。また、米国は世界恐慌以降長期の金融困難に陥っていたため、作品の売却は思わしくなく、日本政府の目論見通りにはならなかった。

以上の考察から、浮かび上がってきた展覧会の特徴として、(1)トレド美術館主催の展覧会と、レーリッヒ美術館主催巡回展という複層的な構造を持つ、(2)日本政府の意図が強く働いて、展覧会趣旨が実現に至るプロセスで変化した、(3)実現には故岡倉覚三を核として形成された個人的なネットワークが寄与した、(4)巡回展の継続か打ち切りかをめぐって、日本とアメリカで相反する動きがあった、以上4点が挙げられよう。本報告により、展覧会の基本的構図を明らかにすることができたが、主に日本側の資料に基づいているため、米国での調査が今後の課題である。本報告を通して、さらなる研究の発展へとつなげていきたい。